

学ぶことを楽しむために

文・山下太郎

ノーベル賞を受賞した益川先生によると、今の日本は「教育熱心」ではなく、国を挙げて「教育結果熱心」である点が問題だと言います。「結果」に一喜一憂しては勉強が面白くなくなる、というのがその主張の骨子です。「結果熱心」ということと言えば、「収穫を問うなかれ」という曾国藩（1811 - 72）の言葉を連想します。この言葉は「ただ耕耘を問え」と続きます。収穫、すなわち結果はどうでもよいというのではありません。結果を気にする前に「耕耘」、すなわち日々の努力を大切にせよという趣旨です。

日本の昔話にも大切なヒントが隠されています。「こぶとりじいさん」、「雀のお宿」、「花咲じいさん」といった昔話を思い浮かべてみれば、これらの物語において、「結果熱心」、すなわち「世の中、結果がすべてだ」と考える立場は、果たして善良なおじいさんの立場か、それとも意地悪じいさんの立場か、どちらでしょうか。善良なおじいさんは、結果的に宝物を手に入れますが、最初からその「結果」を目的として行動したのではありません。

では、意地悪じいさんにはなくて、善良なおじいさんにあったものは、何であったのでしょうか。私は、こぶとりじいさんにとって、それは踊りを愛する心であり、花咲じいさんにとって、それは飼い犬シロを愛する心であったと考えます。この「愛する心」が根っこにあればこそ、道は自ずと幸せな結末に通じていくのです。

学びの山道においても、この「愛する心」があれば、道は自ずと上方に通じています。学びを愛する心とは、学びを楽しむ心です。「楽しむ」と言うと安易に聞こえますが、事実は逆で、それはTVやゲーム等の「もてなし」による楽しみとは本質的に意味が異なります。私たちは実際に山道を歩くことで汗をかき、すがすがしい気持ちになるでしょう。じっとしているより山道を歩く方がずっと「しんどい」はずですが、なぜかこの「しんどさ」は「充足感」や「喜び」に通じています。実際、「汗をかくことを楽しい」と感じる経験が「学びを愛する」王道なのです。

人間は生涯学び続けることができる、という考えに立つとき、その「学び」の先に何があるのか、誰しも気になるところです。しかし、昔話に出てくる善良なおじいさんたちは、そのことを問いませんでした。「何の役に立つのか」という「結果熱心」の問いには、「きっと何かの役に立つ」とのみ答えておきましょう。

さて、「山の学校」ではこの秋学期も、「学ぶことを楽しむ！」をモットーに、それぞれのクラスで様々な工夫を凝らしてまいりました。山登りに喩えるなら、時にひざまずいて路傍の花に目を向け、鳥のさえずりに耳を傾けるクラスもあれば、時に、峻厳な学びの山への畏怖を覚え、「いつかあそこまで」とさらなる高みへの挑戦を誓い合うクラスもあります。その実践の具体的記録の一端を次頁からじっくりご覧頂ければ幸いです。

（山の学校代表 / 山下太郎）

クラス紹介

今月号は、平成20年度秋学期の授業をふりかえり、それぞれのクラスの先生が日頃何を大切に考え、どのような授業を展開しているのかを、「クラスだより」として寄稿していただきました。下記の時間割(秋学期現在)と照らし合わせの上、ご覧ください。

平成20年度・秋学期(9月～11月)の時間割

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん (低学年&高学年) 3:50～5:20	ことば4年A	ことば(作文小5～6年) ラテン語初級講読A	中1～3・数の基本A
水	ことば1年 ことば2年	かず1年 かず2年 かず3・4年A	中1～3・日本語の読み書き 古文講読	ラテン語入門 (冬学期は火曜日8:10～9:30に 変更の予定)
木	ことば3年 かず5～6年	ことば5～6年 かず4年B	中1・英語の基本 中2～3・英語の基本 高1～3・英語の基本	中1～3・数の基本B ギリシア語入門 ウェブプログラミング入門
金	かず3～6年	ことば4年B		ラテン語初級講読B ラテン語中級講読

新しい講師の紹介

九月から着任した新しい先生をご紹介します。

山下 ^{だいご}大吾

京都大学文学研究科博士後期課程在学中。「ラテン語入門」を担当していただいています。冬学期からは、「ラテン語初級講読A」も担当され、キケローの『老年について』を読み始める予定です。

ウェブログも熱い！

山の学校のブログは毎日熱いです。連日授業後には講師の先生による書き込みと、それに対するコメントがどんどんたまりにたまって、もはや数え切れないほどのエントリーになりました(基本的内容は講師による授業記録です)。きっとサーバーも嬉しい悲鳴をあげていることでしょう(この春にはサーバーの容量を10倍アップしました)。ジャンルは多岐にわたりますが、一貫してそこにあるのは、生徒一人一人をしっかりと見つめるまなざしです。いつか生徒がこれらのエントリーを読み、過去の自分と懐かしく再会するとともに、そんな自分をいつも応援してくれた先生方のひたむきな心にふれることで、「何か」を感じてもらえたらと願っています。(山下太郎記)

山の学校ホームページ : <http://www.kitashirakawa.jp/yama.html>

山の学校ウェブログ : <http://www.kitashirakawa.jp/yama/>

「しぜん」 1～6年生 担当 山下育子 / 山下太郎

しぜんだより 秋学期

夏休み明けの9月初日のしぜんクラスでは、一人一人が夏休み中の思い出を記録した「しぜん日記」がたくさん集まりました。この日は、順に発表しながら、仲間の発表にもしっかりと耳を傾ける時間となりました。

「五山の送り火について・陶芸をしたこと」「温泉・水族館・海に行ったこと」「四国のおばあちゃんの畑でお野菜をいっぱいもらったこと」「家でトマトやきゅうりを育てたこと」「アサガオの花の不思議について考えたこと」「雲について」「しぜん観察会に参加したときのこと」他、たくさんありました。しぜん日記の発表を通して、メンバーの夏休み中の体験をお互いが共有できたように感じるとても充実したひとときでした。私もじっくりと聞き入りながら、一つの発表が終わるとホワイトボードに思わず絵を描きます。描きながらお話をしていると、誰からともなくいろいろな意見が出てきて更に話題が膨らみます。そして次の発表へと続きますが、この時間は私にとってもとても楽しい時間です。

そんな「しぜん日記」の中に、一枚の絵が混ざっていました。絵は、大きく枝を広げた大木の上に小さな小屋が乗っている所謂「ツリーハウス」で、きっと、頭の中を夢いっぱいにして鉛筆でデッサンした様子が伝わってくるような絵でした。小屋にはドアと窓があり、地面から樹上のハウスまで上っていくための梯子(はしご)もついています。Yくんは、前に出て絵を示しながら、ツリーハウスの説明をしてくれました。

ツリーハウスについては、以前からクラス内で「つくってみたい...」という声があったのですが、なかなか実現できないままでした。そして暫く、その絵を見ながらみんなで考えました。

「お山の竹とダンボールとガムテープを使えば?」「のこぎりと釘がいる」「簡単にはできないと思う」など、いろいろな意見がでた結果、最後はとにかく『やってみたい!』『やってみよう!』ということになり、次回のクラスでは、早速ツリーハウスのつくれそうな大きな形のよい木を見つけに、園内につづく森の中へ出かけることにしました。

9月のあるクラス テーマ“ツリーハウスをつくる場所を探しに!” 援軍きたる!

いよいよこの日から「ツリーハウスづくり」の第一歩が始まりました。活動を始めるにあたり、お二人の先生にも来ていただくことになりました。幼稚園ひねもす教室担当の梁川健哲先生(京都工芸繊維大学大学院 工芸科学研究科で事務をしながら絵画・絵本創作活動をされている)と、同ひねもす教室と山の学校の先生でもある高木彬先生(同研究科博士後期課程造形科学専攻在籍)です。亮馬先生とともに心強い助けが得られ、ワクワクした気持ちとともにクラスは始まりました。プリントに記入しながら、今後の段取りを確かめます。この日の予定としては、ツリーハウスのつくれそうな場所を探す。

必要な材料があれば集める(森)(竹やぶ) 材料を運んで一カ所に集めておく。
この二つを頭にとめて、さっそく森へ出かけました。



あのサクラの木はどう?



よく見てごらん



あの木はどうだろう?



紙を丸めて望遠鏡にして



森の中は少しくらいね



ツリーハウスに飾ろうよ!



この木は使えそうだし、みんなで運んで行こう!





どんぐり、落ち葉をわけて



ほらっ、この木、登れる



この木は？ 「ミカン！」



「さんせーい」ここに決まり！

森を奥に進み、川へ下りる地点まで探しに行きましたが、「木は大きすぎて登れそうにない」や、「ほどよい高さだけど木が細くて危ない」など、ちょうどよい木はなかなか見つかりません。時間が進むにつれて森はほの暗くなってきました。森の中を分け入って大分探し回っていると、ツリーハウスづくりに使えそうな長い木が見つかったので、持てるだけみんなで協力して運びました。女の子たちは、ツリーハウスの飾り付けに使えそう！...と気をきかせて、木の実、松ぼっくり、落ち葉を手いっぱい集め持ち帰りました。お帰りの準備をしつつ、森には適当な木がありそうで見つけられないこと、森の中までは随分距離があるので道具運びが難しいこと、秋が深まるにつれ森の中はすっかり暗くなるため作業ができなくなる...などの意見も出て、「やっぱり難しいなあ」といったムードが漂っていました。念のために最後にもう一度、山の学校の周辺を探してみることにして、一旦「さようなら」のご挨拶をしました。

玄関の外へ出て見上げると、目の前に数本の木がありました。「この辺の木を三本使ってできないかなあ？」と、プリントの挿し絵にあったツリーハウスを思い出して気づいたのは一年生のYくん。

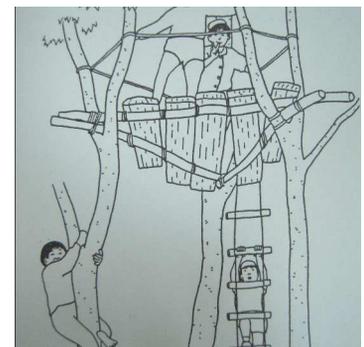
- 「ほんとや！縄ばしごもどこかにかけれそうやな」
- 「あ、これはカエデの木や」
- 「あっちは金木犀、もうすぐ花が咲く」
- 「あれはミカンがなってる、ミカンの木や」

それぞれの木が途中で枝分かれして、その高さもほぼ同じくらい。三本の木の枝分かれた部分に基礎(床)づくりの竹を渡すことも何とかできそうです。どうやら、みんなの思いは一瞬で一致したように思えました。森の中には結局見つからなかった“ほどよい木”が最後になって教室の前で見つかり、半ばあきらめの雰囲気から一転して、この三本の木を「ツリーハウスづくりの木」とすることが決まりました。

10月のあるクラス テーマ“ツリーハウスづくり PART () ”

この日は、みんながクラスに到着してすぐ、次の3つの班に分かれて活動しました。

ツリーハウスの基礎(床)づくり班	あきら先生
ツリーハウスの基礎の上に組んで いく竹を竹やぶで探し、切り運ぶ班	りょうま先生
ツリーハウスへ登るための 「縄ばしご」をつくる班	けんてつ先生



「ロープの使い方プリント」をみんなで確認しながら、
 は、木を斜めに交差させてしばるときに用いる『すじかいばしり』の方法で基礎づくりを始め、
 は、『のこぎり、すべり止め軍手(左手)』で竹やぶへ入り、ほどよい竹を切り倒し、
 は、縄ばしごやブランコを作るときに用いる方法で、棒をぬくとすぐにほどける『てこ結び』の要領を試みながら進めることになりました。生きている木の上にツリーハウスを作るので、釘などは一切使わずに、また木の表面、枝、葉などを大切にしながら、ロープをたくさん使ってつくことにしました。また、高い場所やのこぎりを使う作業など、安全には十分注意して道具の使い方を守る約束をしました。最終的には、いかだなどを作るときに用いる『床しばり』の方法でツリーハウスの床を止めていくことができればおおよそ完成です。最後に、縄ばしごを吊しましょう。



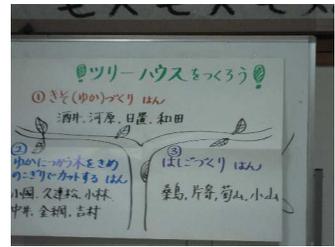
「しぜん日記の紹介」



三本の木の枝に竹を渡す



どの結び方でできる？



班で力を合わせます



[班] 基礎はこう渡せる



よし、結んでいこう



『すじかいしばり』



背の高いUちゃんに頼んで



[班] どの竹がいいかな？



みんなで運ぶヨイショ！



全部、枝はらいをしてから



竹やぶから運び出し



[班] ロープを取り出し



これでよし『てこ結び』



ロープをくるりと丸めて



『丸結び』を等間隔につくる

班に分かれての活動でしたが、それぞれに時間いっぱいまで一生懸命の取り組みでした。

- ・床づくり班は、3本の木それぞれに、ほどよい長さの竹を渡すと三角形の床ができました。次に、竹がクロスした箇所をロープでくくりどめします。高い所での作業なので、脚立を使ってしっかりと時間をかけていました。不安定な場所での作業は、脚立をみんなで押さえて安定させます。
- ・竹切り班は、次々と切った竹を運び出し広い場所に横たえて、次に不要な枝や葉をのこぎりで一本ずつカットしていきます。一本のきれいな竹になれば、「ワッショイワッショイ」とみんなで現場まで運ぶことを繰り返しました。
- ・縄ばしご班は、前回のクラスでみんなが森から持ち帰った木を使い、一人ずつのこぎりで縄ばしごにちょうどよい長さに切っていきます。ロープの扱い方をよく知っているHくんに見ながら、「てこ結び」で次々に上手く輪をつくり切った木を通します。木とロープだけでつくる縄ばしごです。縄ばしごが完成すると、一本のロープの数カ所に、丸結びで結び止めを作っていく、はだして足で挟んでよし登れるロープももう一つぶら下げることにしました。

教室に戻ってからは、それぞれの班に作業の進み具合を発表してもらいました。床づくり班は、もう一カ所結び終わると出来上がるとのこと。竹切り班は、次回、床づくりが完成した上に、必要な長さに竹を切って載せていく予定。縄ばしご班は二種類のはしごが出来上がり、建哲先生が手からぶら下げてみんなに紹介して下さいました。

10月のあるクラス テーマ“ツリーハウスづくり PART () ”

この日は、提出のあった「しぜん日記」の内容を、まずみんなに紹介しました。その中で、この秋に実る多種類のドングリには、毎年実がなる一年型(コナラ、ミズナラ、アラカシ、カシワ、クリなど)と、二年に一度しか実がならない二年型(クヌギ、アベマキ、マテバシイ、シリブカガシ、スダジイなど)があることを調べてきた、Mちゃんの日記を私から紹介した後、ドングリ図鑑を見ながら実際に数種類のドングリの実を見比べてみました。

そんな時、「せんせい...お話が長くなると時間が...」と、いつも時間のことを心配して気がけてくれるMくんの声のお陰で、早速前回の続きツリーハウスの活動に入ることになりました。

縄ばしご班は、すでに縄ばしごが完成しているので、もう少し竹の調達が必要な竹切り班の協力にまわりました。すべり止めの軍手を左手にはめ、しっかり押さえて右手でゆっくりと竹を切っていきます。少し切り込みが出来るとあとは案外上手く切り進められます。一本の竹を切るのも要領と力が必要なので、切り終えた時には相当の達成感が感じられます。そうしたみんなの協力のもとに次々と竹棒が仕上がっていきます。でも、まだ足りないので、亮馬先生率いる竹切り班は竹やぶに走ります。



これは何のドングリかな？



では、今日の段取りは・・・



Aちゃん切り始める



私が押さえておくからね



全部切れたねNちゃん



先生が押さえておくわね



あと何本とれるかなあ



竹を仮置きしていく



UくんをKちゃんが助ける



ほく何本切ったかなあ？



のこぎり上手だね



ほうら、全部ならんだ



(KY君画)

クラス終了時間が近づきました。この頃になると、ほぼ全員が自らスイスイと竹を切っている頼もしい様子が見られ、その成果として竹製の床材が何本も切り揃い並べられていました。床づくり班が完成させた三角形の竹の基礎の上に、みんなで切った竹を仮置きしていくと、なかなか見応えのある床が出来上がりました。この日は、足りない竹の切り出しと、長さを計って竹を切る作業が中心となりましたが、全員が自分の役割をもって一生懸命作業にとりかかっている姿がとても立派でした。後は、次回に『床しぼり』の方法で、竹を一本ずつ結わえていく作業が残りました。

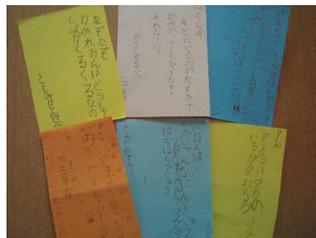
今回のツリーハウスづくりは、現在もまだ継続中です。大木の上に小屋を建てていくといった本格的なものではありませんが、場所探しから組立、完成までを、みんなで考え、力を合わせて出来る「お楽しみツリーハウス」になることでしょう。

最終回では、組み上がったツリーハウスの上を上り、遠く景色を眺めてみましょう。頭上のミカンも収穫して、お味見してみようということになっています。熱いお茶とともに、みんなで『乾杯』できるのが今からとても楽しみです。

(文責 山下育子)

『ことば』 1年生 担当 福西亮馬

このクラスでは、幼稚園の時のように画用紙を切った紙片に、思い思いの俳句を書いてもらっています。



はるやすみ いろんなおもいで つくれるひ
とのさまがえる たまごをうんだ いっぱいうんだ
だいしぜん。しずかですごく きもちいいよ
いえのなか まどをつきぬけ セミのこえ
杏子はね にんぎょうぜったい はなさない
がっこうで うんどうかいが まちきれない

春学期以来、だんだんこの「俳句の紙」が束になってきました。ある時、お家の工夫でカードフォルダーに入れてある生徒を見かけ、私もいいなあと思いました。それでみんなにもフォルダーを使ってもらおうようにしました。もう何枚ぐらいその中に溜まっているのでしょうか。結構楽しみになってきた頃だと思います。

春学期にはよく『しりとり』をしていましたが、今学期はそれにかわって『なぞなぞ』をしています。それを例の紙に書きつけます。たとえば、こんななぞなぞがあります。

「のりこせんせいへ そとにいるのが 大すきで かぜがふくと、しゃべりだす、それな～に？」

このように幼稚園の先生に問題を出したところ、さっそく返ってきた答は「かざぐるま？」でした。それに対する生徒の返事が、以下の通りでした。

「『そとにいるのが 大すきで かぜがふくと、しゃべりだす、それな～に？』のこたえは、かざぐるまでは、ありません。なぜって かざぐるまは、しゃべらないので、ちがいます。せいかいは、ふうりんです。」

と、しっかりした返事です。ほかに、

「えんちょうせんせいへ いえのなかで いちばんこわい ばしょは？」

「せいかいは かいだん。こわいことを かいだん と ゆうでしょ。」

「まみせんせいへ かめれおんは したが くるくるしているか？」

「かめれおんの くるくるしているほうが おすで、くるくるしていないのが めすです。」

「えんちょうせんせいへ きじ の なかに いる しょくぶつは なあに？」

「このまえのなぞなぞ「き」あってます。つぎのもんだいです。ぴゅうま(ピューマ)は、はしりがどれぐらい はやいか？」

などがあります。また、なぞなぞの他に「ぼく、こんなの知っているよ！」と、自分の知っていることを『クイズ』にして出す生徒もいます。頭の中にあることを他人と共有したい時、意味が通じるように書くとなるとなかなか一苦労です。けれどもその負荷が、自然と文字や文章を書くための練習になっているのです。

「にほんは、なぜこんなにちきゅうのなかで、ばらばらなのでしょう？」

「にほんは なぜ おおきかったけど ちいさくなったでしょう？」

1つ目の問題は、その生徒に言わせると序の口で、それが解けないと2つ目の問題は皆目分からないそうです。正解は、以下の通りです。

「もとは ろしあ(ロシア)と ゆわれてる。じつは にほんには ひみつがあって、はじめはもっとでかかったけれども、こうずいに ながされて ばらばらになってしもた(から)。」

その他には、『回文』(上から読んでも下から読んでも同じになる言葉)をしました。中には回文博士が現れて、一度にたくさん飛び出してくることがあります。

- ・シイのみ の いし
- ・まんさい さんま
- ・かいぶつ の つぶいか
- ・ねんりき の キリンネ
- ・みかん かみ
- ・かっぱかっぱ ぱっかぱっか
- ・ようかいが かいかうよ

「かいぶつ の つぶいか」や「ようかいが かい(貝)かうよ」などはうまいなと思います。このような自作は大人でも大変難しいものです。回文には私も野心があって、小学生の頃どうやったら長いものが作れるのかと腕組みをしたものですが、まるでその分身を見ているようで、懐かしい気がしました。

こうした様々なことば遊びの根っこには、どこからでもいいので興味を覚えたところから、その言葉の広がりや応援したいという思いがあります。

私自身の1年生の頃にさかのぼるのですが、たまたま『なぞなぞ1515問』という本を持っていて、そこから当時は雑多な言葉の栄養を得ていた思い出があります。その巻末には『回文』や『早口言葉』も載っていて、「イカ食べたかい」や「ジュゲムジュゲム...長久命の長助!」のような、その頃に染み付いたものが、今でも自転車をこいでいると時折口ずさむことがあります。それがずっと言葉に対する興味を支え続けてくれていたように記憶しています。それなので、今の1年生の生徒たちにも、自分が興味を覚えたようなことをしてみようと思いついた次第です。



授業の最後にいつもしている素話では、以前、なぞなぞにちなんで『スフィンクス』の話をしました。それが意外にも生徒たちに膝を乗り出して聞いてもらえたので、私も気をよくして、最近ではギリシア神話にもちょっと手を伸ばしています。日本の昔話だと、「それ知ってるー!」というおなじみの筋の確認に楽しみがある一方で、向こうの昔話には純粹に知らないことに、「それ、お話してー!」と興味をそそられるようです。

さて、去年のことを思い出すと、今いる生徒が幼稚園にいた頃、送り迎えの時によく「せんせい、おはなししてよ!」とせがまれることがありました。しかし歩いている時はなかなかそのようにはできませんでした。それなので、今このクラスこそ、それができる機会なのだと思います。私も毎回何の話をしたのか、いつか生徒に聞かれても思い出せるように、記憶に留めておきたいものです。

(文責 福西亮馬)

山びこクラブ



対象 小学生(無料)
とき 11月29日(土)
10:00~11:30
内容 『竹馬であそぼう!』

- ・幼稚園でしたことのなかった人は、ぜひ今日が「乗れた日」になって帰ってね!
- ・当時、たくさん乗れた人も、今度は色々な乗り方にチャレンジしてみましよう。
- ・雨の日は『ハンカチおとし』をしったりして、お部屋の中であそびましよう。

「ことば」を学びながら、いつも感心させられるのは、子どもたちそれぞれが、楽しく身近に「ことば」に接している、ということです。非常に柔軟に言葉を読み、言葉を歌い、言葉から想像し、また創造する。「ことばに遊んでいる」というか、そういう「ことば」との豊かな交感に、自然と没頭できる子どもたちは、本当にすごいと思います。

このクラスでは、子どもたちの持つそうした言葉の豊かさを、なによりも大切にしたいと考えています。もちろん、基本的な知識やあきらかな間違いは、そのつど確認することが必要です。しかしそれが一義的な模範解答を教えることに傾かないように、より多義的な世界に開けるように、取り組んでいます。

秋学期では、詩の朗読においては、おもに金子みすずの作品をとりあげています。みすずの詩もまた、声のリズムにのって心地よく響くものばかりです。あるとき、詩を朗読していると、ひとりの子が途中から詩を歌いはじめてくれました。それがごく自然な調子だったので、私はとても嬉しくなりました。詩は「うた」とも読みますが、彼らの朗読の声、読み間違いに怯える細い声ではなく、こうした朗々と響く歌声でありつづけるように願っています。

また、詩の意味について一緒に考えるときにはほとんどいつも、その意味を手がかりにして想像した物語を楽しそうに話してくれます。たとえば金子みすずの「見えないもの」という詩を読んだときのことです。「ねんねした間になにかがある。 / うすももいろの花びらが、 / お床の上に降り積り、 / お目々をさませば、ふと消える。 / 誰もみたものないけれど、 / 誰がうそだといいましょう。」目を閉じている間には、自分の周りはどうなっているかわからない。でも、だからこそ、もしかしたらこんなことになっているかもしれない、と想像することができます。それは「見えないもの」ですが、本当にあるものかもしれない。このように意味を確かめると、すぐに子どもたちはそこから物語を展開してくれました。ある子は、降り積った花びらのなかで、その花びらの一枚より小さくなった自分や周りの人たちのことを話してくれました。その小さな花卉の世界では、小さなお母さんが小さなフライパンで小さな卵焼きを作っています。

子どもたちは、そのようにして物語を話してくれるときには必ず、一緒に絵も描いてくれます。それは、彼らが詩の言葉から情景を想像できた証拠であり、また、彼らのつむぐ言葉が情景と結びついた「生きた」言葉である証でもあります。「せんせい、きいて！ これは でね、その は といっしょに のなかにいたんだけど……」という自発的な言葉の展開を、このクラスでは大事にしています。

作文に取り組む週をのぞけば、毎週のクラスでは基本的に、詩の取り組みを授業の前半におこない、後半は絵本と一緒に読んでいます。子どもたちは絵本が大好きです。しかも、魅力的な絵本なら、同じものでもくり返し読むことを求めてくれます。「また『飛行機にのって』がいい！」と言ってくれることは、私にとっても嬉しいことです。新しい物語へ次々と移っていくことよりも、自分たちに愛着のある物語の世界へ何度でも帰って、その世界をいっそう深く掘りさげていくことのほうが、子どもたちは好きです。いつもの世界に帰ってきたという安心感と、すでに知っている世界だからこそ発見の新しさが際立ってくるということがあるからでしょう。幼い頃の記憶をたどると、たしかに私にも好きな数冊の絵本を何度でもくり返し読んだおぼえがあります。その絵本はいつのまにか失ってしまったけれど、絵本のなかの世界は今でも私のなかに息づいています。

絵本を読み終えて気がつく、いつも机が前へ大きく移動しています。それは、子どもたちが熱中のあまり、無意識に机に身をのりだすからです。授業が終わって机をもとに戻すのは、私のひそかな楽しみです。机を押しだす熱中が、これからも続くよう、願っています。

(文責 高木彬)

『ことば』3年生

担当 浅野直樹

このクラスは今年の春から引き継ぎ、春学期の間でいろいろなことをして、お互いに慣れてきました。そのときの様子から、秋学期は物語を読むことを中心にしたいと計画していましたが、ところが思うようには事が運びません。日本のいろいろな民話を集めた本を用意したのですが、ただ読むだけではおもしろくないと不評でした。それではということで、話を読んでその中から好きな場面の絵を描いてもらいました。このことと関係して、絵本を作りたいという声があがっているので、それもいつかできればなあと思います。また、ただ読むだけではおもしろくないのなら、一人ずつみんなの前で発表する形で読んでもらおうと、絵本をいろいろ用意して、好きなものを選んでもらいました。落語の話をそれらしく読んでくれたり、お気に入りの話を得意げに披露してくれたりと、なかなか立派な姿を見せてくれました。

上記の活動もそうであるように、せっかく少人数のクラスなのだから、できるだけ主体的に関わってもらえるようにしています。昨年度からこのクラスで流行し続けている『二十の扉』(出題者が何か一つのものを決めて、質問者が二十の質問をしてそれを当てるというゲーム)もその一つです。何度もしているとレベルが上がり、難しいお題を考えてくれるので、なかなか当てることができません。

こうした方針から、なるべく強制はしないようにしているのですが、易きに流れてしまうこともあります。もちろん漢字の反復練習などは強制的にしなければならず、このクラスでも継続的に取り組んでいます。あるときは、少し態度が悪かったのでそれを指摘すると、自発的に「やくそくカード」と題してこのクラスでのきまりをみんなで考えてくれました。その中身は「先生のいやがることはしない」、「勉強するときはちゃんとする」といったものです。当たり前のことかもしれませんが、その後はこの約束をきちんと守ってくれました。後から振り返ると、自分たちでルールを考えてそれを書きとめ、しっかりと守るといのも一つの「ことば」の実践だったと感じられます。

(文責 浅野直樹)

『ことば』4年生A

担当 高木 ^{あきら} 彬

このクラスでは、春学期の終りから新しく生徒さんが増えて、より活発に言葉が行きかう場となっています。自分とは別の考え方に身近に接することは、そこからさまざまなことを学び、刺激を受け、またそれによって新たな発想を生みだすことに繋がります。

春学期と同様に、秋学期も、詩・漢字・物語を中心に学んでいます。たとえば有賀連の「大きなお風呂」という詩を朗読したときも、子どもたちの発想の柔軟さ、詩的な感性に驚かされました。

誰も知らない ところす。 / とても大きな お風呂です。

月はひとりで はいります。 / 月があがった そのあとは、

星がみんなで はいります。

地平線からゆっくりと姿を現わした月は、夜空を中天にまであがり、「月があがったそのあとは」、「星がみんなで」またたきはじめます。「大きなお風呂」とは、まるで「夜空」のようです。月が「お風呂」を「あがった」のと、月が「夜空」に「あがった」のが、ここでは掛かっています。

短い詩ですが、そこから子どもたちそれぞれが自由に想像を膨らましてくれます。ある子は、「お風呂が夜空なら、お風呂をわかすための火は、地平線の下に太陽だ」と想像してくれました。月が輝くのも、星が煌めき瞬くのも、夜空というお風呂の底で太陽が炎のように燃えているからです。とても雄大で、美しい情景です。天体についての知識に基づきながら、豊かに想像力を働かせてくれています。

またある子は、「お風呂が夜空なら、入浴剤は銀河と天の川!」と言ってくれました。実際、乳白色の入浴剤が流れだす様子は、「Milky Way(天の川)」そのものです。有賀連のこの詩が雑誌『赤い鳥』(1918-1936)に発表された当時、菖蒲湯や柚子湯はあっても、白く濁る入浴剤はほとんどないはず。これは作者も予想しえない、しかしきっと作者も喜んでくれるであろう、非常に詩的な発想だといえます。

こうした豊かなイメージは、最初から整ったかたちで生みだされることは稀です。この時も、詩を交互に朗読するなかで、また子どもたちが相互に言葉を取り交わすなかで、徐々にそれぞれのイメージが形作られていきました。私が大切にしたいと思ったのは、相手の声に耳をかたむけ尊重し、またイメージがより膨らむような方向へ発展的に言葉を交わすことのできる彼らのしなやかな感性と、それを包みこむ学びの場の雰囲気でした。

これは、成り立ちから漢字を学んでいるときも、アンデルセンの『絵のない絵本』の物語を読んでいるときも、同じです。あるとき、このクラスに新しく入ってきた子に、最初からいる子が、それまでに学んだ成り立ちのことを教えてあげるといことがありました。たとえば、「月（にくづき）」のことや、自分がかつて創った「サッカー」という漢字のことなど。また別の日には、大昔の漢字は文字というより絵に近かったが、徐々に整えられ、ほとんどの場合は簡略化されて、現在の形になったという話になり、ある子が「じゃあ未来の漢字は？」と言って、私が作ったプリントのなかの漢字の下にさらに矢印をひっぱって未来の漢字を書いてくれたことがありました。そのとき、すぐにもう一人の子も「じゃあ、これは？」といて、別の形の未来の漢字を書いてくれました。すると最初の子は「そうか！」といて、さらにさっきの漢字を発展させてくれます。

「ことば」に触れながら、想像力の世界が花ひらき、そこからどんどん展開していく、そういう豊かな感性を、これからも大切にしてほしいと思います。また、そうした感性が磨かれるような学びの場を、これからもみんなと一緒に作り、共有していきたいと思います。

（文責 高木 彬）

『ことば』 2・4年生B 担当 福西亮馬

この秋学期は、新しいメンバーが加わって、当初は昨年度からの発展として短編集の物語を読むことを予定していたのですが、生徒自身が、読むことよりもむしろ書くことの方が好きだということに気付いて、内容を作文指導に変更したという経緯があります。

もともと書くために、読んでもらおうと考えていたので、逆に書くことに意欲があるのなら、目的は達せられたようなものです。今それがせっかく生徒の方から出てきているので、この部分から引き出すことが先決であるというように考えています。一方では読むことも、新しい表現を盗む上では大事なことなのですが、欲を言えばきりがなく、また5・6年生になってから（おそらく推理小説などに興味に向いて）読書量が一気に増える時期があると思いますので、その時期を期待することにしています。

最初の作文は、灰谷健次郎編『子どもの詩がうまれた』から、「子どもの身近にある死」を取り上げて、それをテーマにして書いてもらいました。すると、2年生の生徒のJさんは、ジャイアントパンダの赤ちゃんが、そのお母さんに踏みつけられて死んでしまったというショッキングなニュースのことを、そこから連想して、おばあちゃんの家で小さい頃に一緒に遊んだ犬と猫のことを、そのうち片方が死んでしまっ、今はもう片方も危ないことを書いてくれました。

もう1人の4年生の生徒のRさんは、Jさんのお姉さんですが、ガレージで死んでいた猫のことを、その事件から、自分の命を支えているものが突に当たり前にあるのではないことを、また命に対する善人と悪人の意識の違いを、しかしそれらもまた天国では仲直りできるというようなことを綴ってくれました。2人とも、「書きたい！」と以前から言っていただけに、よく書けていると思いました。

その後Rさんが「物語を書いてもいい？」と提案したので、それがどう展開するか興味を持って今は見守っています。

二人とも書く時の集中力は大変なものです。題名を書いて、1枚目の半分までは誰しも頑張るところですが、その半分以上を過ぎたら、今度は用紙の終わりまで書ききろうと鉛筆を動かしています。そして2枚目に突入したら（普通はそこでちよろちよろで終ることが多いのですが）、またその用紙の半分まで書くのをやめず、それを越えたら今度は3枚目まで...と、帰る時が迫っても、あと5分の時間も惜しんで書き続けていました。そして次の用紙をもらおうと、またそこでエンジンがかかる、といった具合です。

この間とうとうRさんが、家での持ち帰りも含めて3週間かけて、本文10ページの、登場人物の絵つきの大作を完成させました。できた瞬間、「これまでにこんなに長いを書いたことがない！」とのこと。完成させたということには、それ自身に、もう大変な価値があります。それをきっとこれからのばねにしてくれるものと期待しています。

Jさんの方は、幼稚園から小学生に上がったばかりの一年生の女の子とその家族の物語を書いています。「書くより、口で言った方が早い！」と、お話の展開がとめどなく溢れてくるのがすごいです（私の役はアイデアを書き留める助手です）。

こうした作文の指導といっても、書き終わった前のページを読み上げたり、作品自体が完成した時にタイプして本人にフィードバックするというだけの、いたって単純なものですが、何より生徒自身にある意欲が素晴らしいです。このせっかくの作文は、私も原文のコピーと、打ち直したものをパソコンに残しています。また、それが古くなればなるほど価値を増すことを思うと、この頃はかけがえのない宝物に接しているようにも感じます。

（文責 福西亮馬）

『ことば』 5・6年生 担当 浅野直樹

今学期は「書くこと」に力を入れています。

なぜそうしようと思ったのかというと、日頃の雑談でも教材に関わる問いかけでも、非常におもしろいことを言ってくれるのに、いざ書くとするとそのおもしろさが表現しきれてないからです。これはもったいないということで、どうしたらうまく書けるようになるのかを模索しています。

それにしても書くことは何て難しいのでしょうか。私自身もいつもこの「山びこ通信」を書くのに苦みます。中には文章を思うように書ける人もいるようでうらやましい限りですが、小学生を観察していると、高学年ともなると口は達者になりますが、大人のように書ける人は滅多にいません。そもそも字を書き始めるよりも話し始めるほうが早いのですからね。プラトンも書き留めることは記憶の助けになるくらいで、あくまで重要なのは対話であると言っています（といっても私たちはプラトンが書いたものを読むわけですが）。

このあたりにヒントを得て、単にうまく書こうとするよりも、対話を想定すればよいのではないかと思い至りました。秋学期の最初には夏休みの出来事について書いてもらったのですが、いきなり書き始めずに、いつ、誰が、どこで、どうしたのかといった問いに先に答えてもらいました。そのおかげもあってかすらすらと原稿用紙3枚ほどを書き上げてくれたのはうれしかったです。

また、山の学校では、小学5年生以上の人全員に学習記録表として毎日の記録をつけてもらっています。そこに1行や1単語くらいしか書いてなかったとしても、何をしたのか、どこがおもしろかったのかなどと聞いていくと、いろいろなことが出てくるので、それを書いてもらうようにすると記述欄がすぐに埋まります。

もう一つには、例えば部活を取るか勉強を取るかといった葛藤場面について自分ならどうするかを考えてもらうモラルジレンマ授業を試みました。まだ書くには至っていませんが、やりとりの段階では盛り上がりを見せているので楽しみです。

(文責 浅野直樹)

『ことば(作文指導)』(5・6年生) 担当 高木 ^{あきら} 彬

ジャック・ア・ノウリの話しをしたげよ。
ジャックは9才。元気のある男の子で、外で遊ぶのが好きだ。
ふざけたりはしゃいだりしない、いい子だ。ジャックはよく家の林に遊びに行く。
今日もジャックは一人で林に遊びに行った。
ジャックが虫とりをしていると、木になにかひっかかっている物を発見した。
ジャックにとどきそうにない高さだ。三メートルほどある。ジャックはそのひっかかっている物を手に入れたくて、物がひっかかっている木に登りはじめた。
あとちょっとのところまで落ちた。これを十回ぐらいくりかえした。そしてやっとそのひっかかっていた物をとった。それは、五平方センチメートルぐらいの小さい青色をした球だった。……

その「小さい青色をした球」とはいったい何なのか。このあとジャックはどうなっていくのか。非常に想像力の掻きたてられる書き出しではないでしょうか。今この文章を読んで下さっているあなたも、ここからどのように物語が展開していくのか、想像してみてください。

実はこれは、小学5年生の生徒さんが実際に夏休みに書いてきてくれた物語の冒頭部分なのです。引用にさいして、漢字や文章に手は加えていません。作品は、ここに載せることができないほど長大なのですが、私はこの冒頭から結末までを夢中で一気に読んでしまいました。これは誇張ではありません。文字通り「夢中」になって、まるで夢の中を駆けるようにして読んでしまったのです。

そのとき私が思ったのは、おそらく作者である彼もまた「夢中」になってこの物語を書いたのだらう、ということです。書くことを楽しんでいる、という気分が、原稿用紙のあちこちから滲み出ているからです。またそれは、夏休み明けに彼がこの作品を私に渡してくれるときに、すでに分かっていたことで

もありました。それはそれは満面の笑顔で、まだ読んでいない私に、それこそ「夢中」で、この物語のことを話してくれたのですから。

あとでお母様にうかがうと、生徒さんはこの作品のために、題材についての綿密な下調べを行なったのだそうです。楽しんで書くということは、こうした意識の高さに裏打ちされています。それは彼の他の作文についてもいえることです。基本的にクラスでのやりとりは、文章表現の技術的な説明をのぞけば、いま書いている作文のテーマを一層掘り下げるにはどうすればいいか、という前向きなものに尽きます。

作文の技術面でのサポートはもちろんのこと、このクラスで大事にしているのは、こうした彼の表現意欲をより高め、彼の文章世界をさらに広げるような、積極的な対話です。

さて、「小さい青色をした球」を取ったあと、ジャックはどうなったのでしょうか。実はジャックは、なんと、その「球」に吸いこまれて、恐竜のいる時代へタイムスリップするのです。そこで、トリケラトプスの「リトプ」とアンキロサウルスの「アキルス」に出会います。（それぞれ、きちんと元の種族名を使って、名前をつけてくれています。また、この出会いの場面も、ジャックが食べようとしたときにポケットのなかのビスケットがそれぞれリトプやアキルスに変化する、という非常に面白いものです。）そこでジャックはリトプにこのようなことを聞かされます。この時代には「ガート」という悪魔によって各時代の草食恐竜と肉食恐竜が集められ、彼らは魔法で操られて戦争をさせられている。自分たちがビスケットにされてしまったのもガートの仕業だ、と。こうして、リトプとアキルスと共にジャックは、ガート率いる肉食恐竜軍団に立ち向かいます。そして見事ガートだけを打ちのめすのです。私が一番好きなシーンは、冒険を終えて、もとの時代に戻ってきたジャックが、家に帰る前に「とっておきの場所」に行くところです。「そこはおちばのいっぱいあるところでふさふさだった。虫が来ないため、じょちゅうぎくを何かしょか植えてある。ジャックはねころんで空を見上げた。『また会えるといいね。』 雲がリトプとアキルスの形をしていた。」

(文責 高木 彬)

山の学校・古典への誘い

「古典」を意味する英語のクラシックという言葉は、語源に照らせば「最高の作品」を意味します。古文、漢文、ギリシア、ローマ……。『山の学校』ではそれぞれに入門と講読のクラスをご用意しています。「最高の作品」にふれる学びの場にあなともぜひご参加下さい(詳細はお問い合わせ下さい)。

また、来年三月には、下記の要領で「古典の夕べ」を開催いたしますので、併せてご案内いたします(参加費無料。配付資料の関係で、参加ご希望の方は、事前に「山の学校」までご連絡下さい)。

連絡先：075 - 781 - 3215 / taro@kitashirakawa.jp

記

『古典の夕べ』～古典語を学び古典文学を読む～

日 時： 2009年3月7日(土) 13:30～16:30

場 所： 京大会館 102号室

〒606 8305 京都市左京区吉田河原町 15 - 9

13:30 - 14:50 『ラテン語を学びウェルギリウスを読む』
山下太郎(山の学校代表)

14:50 - 15:00 休憩

15:00 - 16:20 『ギリシア語を学びホメロスを読む』
広川直幸(京都大学古典語講師)

小学生・かずの部

『かず』1年生 担当 うえおなみち 上尾真道 / 福西亮馬

一年生のかずのクラスは、秋学期に入り、これまでのようなパズルの問題に加えて、本格的にかずを扱う問題にも取り組み始めました。とはいえ足し算や引き算の練習を黙々と行うだけでは、ちょっと物足りないような気がします。反復を通じて計算の決まりを「身につける」ということももちろん大事ですが、かずの勉強を始めた今だからこそ、そうした決まりの背景にある原理・原則をちょっと覗いてみて、そこからどんどんかずの世界に興味を持ち、視野を広げていって欲しい。そのような思いから、毎回、私と福西先生とで工夫しつつ、色んな課題に挑戦してもらっています。

今学期のはじめのほうでは、新たに「一筆書き」に挑戦してもらいました。最初は簡単なパズルを解くことから始まりましたが、その後、一筆書きのルールを覚えてもらい、様々な図形の中から一筆書きできるものを探したり、また自分達の手を動かして書いて確認してみたりと、本格的に図形の世界に取り組んでもらいました。図形の世界と言いましたが、数学では「幾何学」と呼ばれている分野にあたります。中でも、一筆書きの問題というのは、本来なら大学などで学ぶような「位相幾何学」という分野で扱われているものです。もちろん授業では、それほど難しいことに挑戦しているわけではありません。けれども、図形の中にも一筆で書けるものと書けないものがあるということへの些細な気づきが、実は既にかずの世界の根本にあるような複雑な仕組みと接しています。そうした気づきも、今はまだ小さな種かもしれません。しかし、それは知的な好奇心というとても大事な種です。様々な可能性に開かれている今のうちにこそ、生徒たちには、基本的な計算の仕組みやルールなどを学ぶと同時に、そうした知的な好奇心の種を自分達の中にそっと蓄えていって欲しいと思っています。

生徒たちは、こうした期待に答えてくれるかのように、自分で手を動かし試行錯誤しながら、目の前の問題に熱心に立ち向かってくれました。時には、なかなか思うように解けない問題を前にして見るからに悔しそうな顔を見せることもありましたが、そのひたむきな顔には、目の前の壁を乗り越えようとするエネルギーを感じ、感心させられます。

さて、こうしたひたむきさをできるだけ真っ直ぐに伸ばしていくためにも、生徒達の取り組みをそばで丁寧に応援してあげたいと思いますが、それは、すぐに答えへ導こうとすることではなく、「自分の分からないところに留まる」のを助けることによってだと思っています。こんにち、インターネットなどの普及も手伝い、知りたい情報・答えが簡単に手に入る時代になりました。今後ますますこうした傾向は高まることでしょう。これは大変便利なことですが、それは時に、考えることを怠けることの助けともなります。こうした時代の流れは避けられないことではあると思いますが、だからこそ、じっと分からないことに留まって考え続ける力を鍛えることが大事になる時代になると思っています。

山の学校の授業で生徒達がじっくり考え続けた成果は、ファイルにいっぱい挟まったプリントが象徴しています。ひとつひとつが真剣に取り組んだ結果です。今では新しいものを挟むのもやっとなったファイルを、生徒達は時々誇らしげに見返しています。「この問題はすぐにできた」、「この問題は難しかった」と過去のプリントを振り返りながら、そこに春と秋の二学期の間に自分達が一生懸命やりぬいたことの厚みに対する自負を感じているように見えます。先日、パンパンに膨らんだこれまでのファイルに代えて、新しいファイルを配りました。このファイルに、これからまた、知的な好奇心の種と一緒に、真剣に考え抜いたことの証をパンパンに蓄えていって欲しいと思っています。

(文責・上尾真道)

『考えられるところまで考えること』

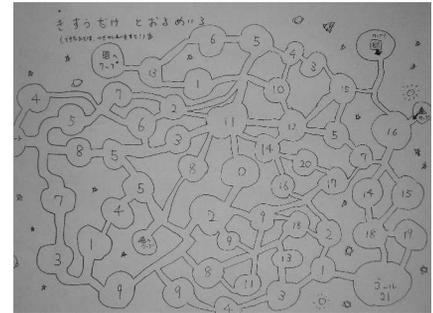
ある時、「先生。あんな、無限よりも大きい数を教えてあげようか？ それはな、2無限！」と、得意になって教えてくれた生徒がいます。私も昔それと全く同じことを口にしていたことがあり(おそらく多くの方もそうだろうと思いますが)、まるで自分の分身を見ているような思いがしました。それと同時に本当のところを懇々と教えたいという衝動にも駆られました。結局それは我慢したのですが、というのも「2無限」という大切なその生徒の言葉を翻訳すれば、次のような意味になるだろうと考えたからです。「私は無限のようなまだ知らない数にとっても興味がある」と。つまりそれは、考えても考えてもきりがないことに対する挑戦状なのだと思われたのでした。

算数への興味にはおおまかに二つあって、一つは計算規則など「数の仕組み」に対する興味で、もう一つは「考えること」それ自体に対する興味です。前号でもそのように述べ、前者は学校で習ってから復習していく方がより効果的なので、今の時期は『迷路』や『間違い探し』を使って、「考える視野を広げること」に工夫しながら取り組んでいる、と書きましたが、秋学期も同じくその方向で、上尾先生

と協力して授業を進めています。今回は『あみだくじ』や、『一筆書き』とその延長にある『点つなぎ』（1、2、3...と数を探すうちに絵ができるもの）のプリントを用意して取り組みました。これらは、根っこは同じく「最後まで考える」ということを応援するためのものです。

一方、数の仕組みに対しても、そのままにしておくというわけではなく、何か適宜できることを選んでしようと思いました。というのも、生徒の目がいつも嬉々としていて、あたかも「（算数に対して）興味津々だから、早く色々なことを知りたい！」と迫って来るかのようだからです。かといって、学校で近々習うことの単純な先取りをさせては、むしろせつかくの好奇心を水で薄めてしまう恐れがあり、学校で習わない内容をするにしても、その前にあまりたくさんの予備知識が必要となることも授業では展開できません。

そこで今学期は、あまり予備知識のいらない、かつ数の仕組みにおいて最も基本的な事柄である「奇数・偶数」を取り上げました。2が偶数で、3が奇数ということは、ほとんど当たり前近く、そのせいか学校であまり詳しくは習わないのですが、むしろ好奇心があるうちに触れておいた方が「当たり前」と思わずに刺激を受けられるのではないかと思います。それが今後どこまでも重要な「数のセンス」になっていくことは間違いなく（今 $2+3$ の計算をする時でもそうですし、将来、三角関数やその積分を深く理解する上でも登場します）なるべく早いうちから身に付けておくとういものだと判断しました。



（奇数・偶数の導入）

定義は、半分にできるものが偶数で、1個余るものが奇数ということですが、当然、1年生には「数を半分にする」ということが当たり前ではなく、慣れるまでにしばらく時間がかかります。それでも後の予備知識が不要となることへの期待から、粘り強く取り組んでみたところ、だんだん自分のものになってきました。そして、その基本概念を使って「考えられるところまで考えてみる」ということに2、3授業時間を使って挑戦してみました。

奇数・偶数を使って、どのように数の仕組みを考えるかと言えば、たとえば「偶数+偶数=偶数」と直感的に分かったとしても、「奇数+奇数=奇数？」という予想は、実際に一つの計算（ $3+3=6$ など）をしてみれば、あっさり裏切られてしまいます。そこに数の広がりを感じてほしいというのが狙いです。

しかし当然ながら、最初にその要領を得ることが難しかった生徒も少なからずおり、私もそのことで反省していたのですが、次の週になると、逆に生徒の力に驚きました。それは、一週間前にあられだけ必死の思いで考えあぐねていた生徒が、嬉々として「はい！」と手を上げてくれたことです。それも偶然ではなく、先生が質問するたびに逸早く手を上げるのです。その時は上尾先生が前で説明していたのですが、「じゃあ、14は...奇数、偶数どっちかな？」「はい！」「じゃあ、N君」「偶数です」「それは、なぜかな？」「だって、7と7で分けられるから」「正解。...じゃあ、次。15は...」「はい！」「...じゃあ、またN君」「奇数！」そこで理由を聞くと、「だってさっきの14は偶数で、今聞いた15は1足しただけだから。1を足したら偶数は奇数に、奇数は偶数になる。それで！」「正解！」。私も、おおと思いました。深いところを理解していたからです。他の生徒もそれに続きます。そしてみんなで乗りに乗って、偶数の時は全員、江戸はるみの「ゲー」のポーズを、奇数の時は「ゴー」のポーズをするという展開になりました。それがおかしくて余裕があるようにも感じられました。

それを見越して今度は、45など大きい数はどうすれば偶数か奇数かを見分けることができるかというテーマに踏み込みました。そこで上尾先生は、10、20、30、...90が偶数であることを、みんなの頭で考えて確認していきました。「じゃあ、100はどうかな？」「偶数！だって、10足してもまた分けられるから」「それに50と50で分けられるから！」「正解。じゃあ、45は？」と、また考えます。実際、45個の を書いたり、計算している生徒もいれば、40をひとくくりにして偶数、そこから、奇数、偶数...と数えて、「45は奇数！」と答える生徒もいました。

そこで最後の生徒の答について、みんなでまた一緒に考えました。つまりこの2、3時間の授業は、1の位が偶数か奇数かを決めているという「数の仕組み」に挑戦したのです。それは一見、最後だけを切り取って見れば、すでに誰かが知っていることの知識の授受と思われるかもしれませんが、しかし1年生にとっては、自分の限界を試され悔しい思いもしながら、全体では「考えられるところまで考える」という、一つの冒険だったのではないかと思います。

実際、小学校の算数と言えば、計「算」の習熟が主体です。しかし文章題にしても計算を既知の答に当てはめることばかりが、これから続く数学のすべてであると言えば、それはしばしば誤解を招きます。ところで、1年生と6年生にインタビューすると、1年生の方が算数を「好き」と答えます。なぜなのでしょう。私が思うのは、1年生の頃の「算数？好き！」というのは、イメージであり、それは「まだ知らないものを早く知りたくて、うずうずしている！」という気持ちの表れなのだろうということ

す。しかし学年が上がるにつれ、答に当てはめることの技術がどうしても優先され、以前の期待から次第にずれていくことの失望が、上のような回答につながっているのではないかと考えます。もちろん計算はそれ自体ですでに大事です。しかし冒頭の無限への憧れを示してくれた生徒が、もし未知に対するイメージを今抱いてくれているとすれば、貴重なことです。それゆえに私たちにも応える義務があります。そして今回、それに見合う冒険と言えるかどうか、「考えられるところまで考えること」に挑戦してみました。それはまた、春学期から取り組んできた『迷路』や『間違い探し』の中にある、「考えることをあきらめない」気持ちからつながってきていると考えている次第です。

(文責 福西亮馬)

『かず』 2年生

担当 高木 彬^{あきら}

一冊のドリルのなかには、その学年の問題のパターンが、一通りそろっています。子どもたちにとって、ドリルを一冊やり終えることは、「かず」にたいする達成感や自信へとつながることでしょう。また同時に、終えたドリルを見直すことは、自分の得意な問題と、そうでない問題を、再確認することにもなります。

苦手な分野はだれにでもあって、それを得意分野に変えていくことが、「かず」(あるいは「学び」)の醍醐味でもあります。どの問題を苦手と感じるかは、基本的には一人ひとり違うのですが、ドリルに取り組むなかで、ときには、みんなが同じ問題で「わからない」と手を挙げることもあります。それはたとえば次のような問題です。

2つの数があります。ちがいは75です。
小さい数がつぎのとき大きい数はいくつでしょう。
42 80

さっと一読しただけでは、ちょっと意味のとりにくい文章だと、私は思いますが、どうでしょうか。

注意して読めば、「2つの数」というのは「小さい数」と「大きい数」のことを指していることが分かります。つまり、「小さい数」と「大きい数」という「2つの数」があって、その差が「75」ということです。その「小さい数」が「42」のとき(あるいは「80」のとき)「大きい数」はいくつか、ということが、ここでは問われているのです。(ちなみに、答の「大きい数」は、 $42 + 75 = 117$ 、 $80 + 75 = 155$ 、と求めることができます。)

一般に計算問題よりも文章題のほうが難しいとされるのは、文章題には通常の計算に加えて問題文の読解が必要だからです。落ち着いて問題文を正確に読みとって、論理的に考えることができるか、それが文章題では試されます。逆にいえば、たいていの場合、問題文をゆっくりと読んで、そこに書かれていることを一つひとつ整理していけば、おのずと式を立てることができます。

みんなが上記のような問題を「わからない」としてしまうのは、読解力がないからとか、そういうことではなく、ただ単純に、一つひとつの問題にじっくり時間をかけていないからという場合がほとんどです。ドリルで計算問題などをリズムに乗って解いている途中に、急にこうした問題がでてくると、それまでの流れにまかせて読み飛ばして分からなくなってしまうことがあります。実際、「わからない」と手を挙げた子の隣へ行って、一緒にゆっくりと問題文を読み返してみると、それだけで「わかった!」と言って解いてくれることが、非常に多いのです。

もちろんこうした問題は、公式的に解法を暗記しさえすれば、答を導くことはできます。しかし小学校低学年ならまだしも、高学年、中学校、高校と進学するにつれて、問題のパターンは飛躍的に増え、それらを網羅することはほとんど不可能になります。パターンの詰め込みだけでは、そのパターンに少しでも手を加えた問題がでてきてしまえば、応用がきかないので、それだけでもう「お手上げ」となってしまう。なにより、そうした勉強ほどつまらなく、また無意味なものはないでしょう。人生を豊かにするような柔軟な論理的思考力を身につけるためには、やはり、入り組んだ問題文でもじっくりと自力で読み解く習慣を今のうちからつけておくことが大切です。

ドリルと並行して「まちがいさがし」などのパズルに取り組んでいるのは、このように時間をかけて一つの問題を考えぬくことに、積極的に取り組む姿勢を育むためです。じっくりと考えることは楽しいことだ、というふうになれば、「やらされること」は「やりたいこと」に一転します。こうした意味でも、自主的にドリルを自宅でもやってきてくれる子が増えてきたことは、嬉しいことです。顔を見るなり「せんせい、6ページやってきた!」と言ってくれるときの笑顔を、これからも大切にしていきたいと思います。

(文責 高木 彬)

今学期も、基本的に春学期同様、パズルを基軸にドリルや自作プリントなどを用いて、「かず」についての勉強をしていきました。

クラス全体として、集中力や問題に取り組む力を向上させようと取り組んでいます。その一環として子どもたちの興味を惹くパズルを基軸に置いているのですが、秋学期に入って、次第に似たような問題に飽きてきている場面が多く見られました。これでは本末転倒で、集中力などを求めるはずのパズルが子供たちにとってネガティブな要因となってしまいます。今学期はそのような子どもたちに対して、どのような問題なら取り組みやすいのか、集中力を保つにはどのような工夫をすればよいかなど、春学期同様手探りの状態でした。そこで、まず視覚的な楽しさを取り入れて迷路や「イラストロジック」を導入してみました。最初は、ルールの理解が進まず、ほとんど手付かずの問題もありました。しかし一緒に根気よく解いていくうちに、次第に一人のできるようになっていったのです。「できた!」と言って完成した絵を見せてくれると、子どもだけではなく私も嬉しくなりました。しかし、これもまた、マンネリ化するかもしれません。今後も様々な角度から「かず」に触れられるような問題を子どもたちに提示していこうと思います

またパズル以外では、何枚かの自作プリントを用いて勉強しました。特に長さや重さ、水の容量に時間といった独自の単位をもつ分野を中心に行いました。単位の変換などは、ここで苦手なままにすると今後も苦手なままになる可能性が大きいので、なぜそうなるのかといった点も含めて、また4年生は学校で習った面積とも絡めて、勉強していきました。まだ実際の問題ではなかなか生かすことができませんが、今後はそうした点も含めて問題を出そうと思います。

ドリルに関しては、積極的にやってきてくれる子もいれば、そうでない子もいます。私はやる気を持ってやってくれることが大事だと思い、あまりドリルをクラスで主軸に据えることはありませんでした。ただやってきた分に関しては、採点と同時に間違いの訂正などをしっかり見てきました。今後もそのようにやるつもりですが、間接的にもドリルをやらうとするやる気を出してもらえような導入（例えば自作プリントや市販の参考書の例題）などを利用していこうと思います。

(文責 岸本廣大)

問題 1

まさお君は、お寿司屋さんでお寿司を食べました。イカとウニを食べて、1000円払いました。ウニは、イカの4倍の値段です。イカとウニはそれぞれいくらですか。

この手の問題でよくある間違いは、数字を見ただけですぐに飛びついて、 $1000 \div 4$ としてしまうことです。やはりそれだと自分で自分の立てた式の意味が分かっていないことになります。本当に立てなければいけない式は、 $1000 \div 5$ です。

実はこの問題は、過去に2回解いていたにも関わらず、3回目でも、全員が上記と同じ間違いをしていました。それは、これまでの私の補助が生徒の自力を妨げていたことにも一因があります。

今学期はよりその反省に立って、毎週、解き方の同じ問題を出し続けました。そして後になるにつれて補助を減らしていき、自力で解ける部分を同じ問題の中に増やしていくように配慮しました。

「じっくり」という言葉の中には、まず何に注目すればいいかを考えること、そのためには問題文を読み返すなど自分にできる努力をすべてすること、という意味が含まれています(ちなみにこの着眼点と集中力はパズルで養えます)。それを応援するかたわら、自分でヒントを見つけ出す手立てとして、今学期からは「線図をかいて考えること」を練習しはじめました。しかしこの線図は曲者で、慣れないうちはわざわざヒントになっていないようなかき方をしてしまいます。しかし面倒くさがらずに辛抱して取り組んでいます。

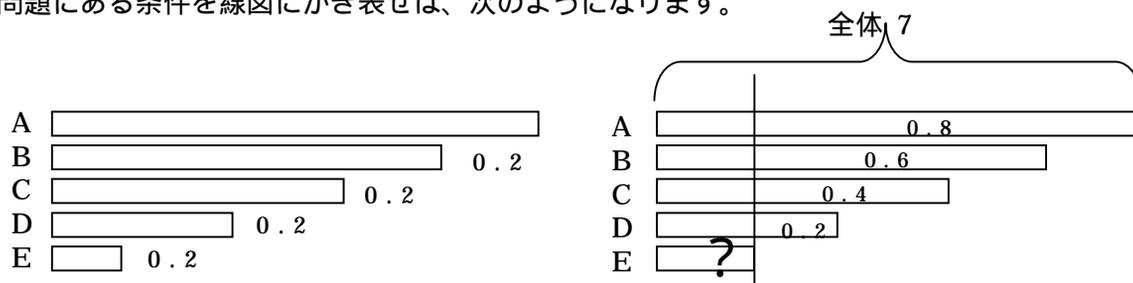
さて、一つの文章問題を解くためには、いくつものチェックポイントを自力でパスする必要があります。それは、まず問題のイメージがで上がること(想像力)、イメージしにくい時は、線図をかいて自ら助けること(工夫する力)、そして、線図を読み解いて、まず何から求めればいいのか見通しをつけること(着眼点)、その後さらに必要な式を順に立てていって、答までの道筋を組み立てること(論

理と集中力) それぞれの計算が正確であること(計算力) 最後に、チンプンカンプンな答が出ていないか、題意と照合すること(見直し)といった点です。それらをすべて自力でクリアできるようになって、やっとある一つの問題に関してその生徒は「あがり」と言えます。もちろんいきなりゴールに辿りつくことはできませんが、「ふりだしにもどる」ということが勉強の世界にはない以上(「2歩もどる」ぐらいはありますが)地道にしていればいつか辿りつけます。

具体的に、どのような手順を辿る練習を重ねればいいのか、次の問題を通して見ていこうと思います。

問題 2
 A、B、C、D、Eのテープがあります。
 A、B、C、D、Eの順に長く、それぞれ0.2mずつ差があります。その5本を足すと、ちょうど7mになります。それぞれ何mですか。

問題にある条件を線図にかき表せば、次のようになります。



どの生徒も、最初は左の図のようにかくところから始まりました。この図ではまだ情報が整理されておらず、また合計の7mという大切な情報を書き忘れてしまっています。加えて、定規を使って一生懸命に仕上げようとする生徒もいますが、図は手段であって目的ではありません。そこで、問題を解くことから離れないために、フリーハンドに慣れるようにも勧めています(定規を使った左の図よりも、フリーハンドの右の図の方が、解くためには優れています)。

そして、右の図のようかければ、何に注目して求めればよいかが一目瞭然です。つまりE(「?」の部分)が分かれば、後はEから0.2mずつ足していくことで順にAまでのすべてが求められるという、答までの道筋が分かっていることになります。その道筋は実際以下の計算で辿ります。

- 1) たて線の右側部分 = $0.2 + 0.4 + 0.6 + 0.8 = 2$ 、
- 2) たて線の左側部分 = 全体 - (たて線の右側部分) = $7 - 2 = 5 = \underline{\underline{Eの5倍}}$ 、
- 3) $5 \div 5 = 1 = E$ 、
- 4) $E = 1$ $D = 1.2$ $C = 1.4$ $B = 1.6$ $A = 1.8$ 、
- 5) 見直し: $A + \dots + E = 1 + 1.2 + 1.4 + 1.6 + 1.8 = 7$ 、
これは題意に適する。

しかし、実際の生徒の解答を見ていると、1)の際に、たて線の右側の部分が0.2ずつ増えていることをすっかり忘れて 0.2×4 と求めてしまったり、1)そのものを飛ばしていきなり $7 \div 5$ という計算をして意味の無いことに陥ってしまうケースがよくあります。それらのミスは、よくよく線図を眺めれば回避できることなのですが、なかなか、自分がさっき線図をかいたという事実と、それが問題を解くために使えるという事実とが繋がらな(つまりせっかくの補助の使い方をマスターする)には、まだまだ練習と時間が必要です。じっくり粘り強く取り組んでいきたいです。

それでもここ最近では、かれこれ何週間にもわたって同じ問題を出しているせいか、半分以上はいつでも自分で解けるようになってきたことが嬉しく、最初よく聞かれた「えー、また同じやつ?」という声も減ってきたように感じます。この前は、お母さんに教えてもらったことを自信にして100%自力で解けるようになった生徒もいました。また、「...あ、これならできるわ。同じようなやつ、もう1枚ないの?」という嬉しいリクエストも出てきました。ぜひそのように1回できたことで油断せずに、「もし数字が変わったら、自分はまたできなくなるのではないかと、良い意味で自分を駆り立てるくせを身に付けてほしいと願います。それはきっとどんな場面にも役に立つことでしょう。

(文責 福西亮馬)

このクラスの目的は、これまでしてきたことの総復習です。過去の学年のドリルにさかのぼって基本を見ていき、以前のつまづきを一つずつクリアしていくことを主にしています。今は二人の生徒が通ってきてくれています。そして、それぞれに合わせたドリルを使って応援しています。また副教材には、一人には『間違い探し』を、もう一人には『迷路』をしています。別々なものを用意するには意味があって、それはお互いの学年が違うことへの配慮です。

さて、生徒のEさんは、とても向上心のある生徒で、特に「間違い探し」をしている時に、そう強く思いました。たとえば「これは去年、A君が結局最後の一つを見つけられなかった問題だよ」と発破をかけてみたところ、「え？ あのA君ができなかった問題？ よーし、やってみる！」と元気良くやり始め、本来なら30分以上かかってもおかしくないところをあきらめず、15分ぐらいで全部の「違い」を見つけてしまいました。「最後の1個はきっと難しいよ」とあらかじめ声をかけていたのですが、それも見つけ出した時には（ガラス瓶の表面の小さなテカリという、思い込むと目に入っているもそれと見つけられないものでした）大喜びで、「やったー！ここに『新記録、何分』って書いて。じゃあ、こういう『超』難しいのを、来週も用意してきてね！」と。そしてその次の時にも、「あの問題、用意してきた？」と言うので、「これ、星5つの問題だし、やってみる？」と聞くと、「うん！」と言って、さくさくクリアしていきました。すごいなと思っていると、「ねえ、星6つはないの？」と聞くので、「あるけど、でも…」と答えると、「それやりたい！やりたい！」「うーん…」「だって私、スーパー小年生だもの！」という具合です。

一方、生徒のMさんがしている迷路はというと、高学年用にバージョンを上げた、絵の浮かび上がってくる迷路です。これは前号にも書いたことですが、Mさんとは、ドリルが終って、その迷路をすることを一つのリズムにしています。かれこれ15問以上は解いてきただろうと思いますが、何事も継続は力で、最初20分ほどかかったそれが、今はびっくりするぐらいの速さでできてしまいます。この前かかったのは、たったの5分でした。私の方は手加減しているわけではなく、いつも通りです。それを楽しみにしてくれている様子なので、私も前日になると、「ああ、そうだ。次の問題…」と思って用意します。ところがこの1問1問が、実は本にあるそのままを採ってくると、大人でもきっと理不尽に感じるぐらいに袋小路が多くて、ある程度、枝道を塞いでおかなければなりません。この加工がうっかりすると正しい道を塞いで答えがなくなってしまうので、目を皿にしなければならぬのですが、それでも最後にできた時に絵が浮かび上がってくる仕掛けには、とてもやる気を応援してくれる要素があるので、やはり手放せずに毎週1問ずつ加工しては使用しています。

その取り組みでMさんに感心するのは、枝分かれのポイントから選んだ道が袋小路に突き当たった時、そこであきらめてしまわずに前のポイントを探して戻っていることです。さすが、黙ってその行き止まりの事実を受け入れて、粘り強く取り組んでいます。これは簡単なことではありません。それは算数でも「場合分け」の考えにつながるので、大事な経験にしてほしいと思います。そして出てきた迷路の絵を「おお」と眺めて、じゃあまた来週、という流れになります。このような少しずつの達成感の積み重ねが、応援になっていればと願いながら、実際、ドリルにおいても、「以前できなかったことが、今できるようになっている」という跡が見られます。以前、宿題を「ここまで」としていたのに、ずっと先のページまでできてくれました。それを丸つけしながら、とても嬉しかったことを思い出します。

今いる勉強の過程は、実際には人それぞれです。けれども、私はよく石段をイメージするのですが、どこに登っている人であっても、それぞれの一段は一段として同じ頑張りや要求するのだと思います。それを登ろうとする進行形である限り、応援したく、反対に進行形をやめてしまえば、どこに登っていようと、その生徒を叱咤する必要があるでしょう。それには、山下先生のよくおっしゃる通りだと思います。「生徒のstudentとは、ラテン語のstudeo（私は情熱がある）の現在分詞studensが元です。つまり学ぶことに対して現在進行形であることが生徒の本質なのです。それをやめたら、studentではなく、doctus（「教えられた者」＝「学ばなくなった者」）です」と。

（文責 福西亮馬）

『転がる石に苔は生えぬ』

「ファースト・モーメント」と言えば、「最初の瞬間」という意味ですが、物理でモーメントと云えば、物体を回転させる力です。(厳密には「力」ではないのですが、平たく言うことにします。) ということは、ファースト・モーメントを物理で翻訳すれば、「その物体が転がるきっかけとなった、最初の力」ということになるでしょうか。

このクラスでは、算数から数学に変わった後の展開でも引き続き興味を持ってもらえることを願って、その動機付けとなるための『数論の初歩』と『論理パズル』の二本柱で取り組んでいます。『数論』の方は今学期から始めたのですが、それについては次回の稿に書きたいと思います。この稿では、去年からの取り組みである『論理パズル』に的を絞って書こうと思います。

『論理パズル』は、前号を参照していただけたらうれしいのですが、一言でいうと、複数の発言(条件)を元にして、事柄が真実かうそかを仮定しながら、矛盾のない答を導くというものです。授業ではその答までの道筋を文章で証明するところまでを指導しています。

最初はどうしても生徒によって得手不得手が分かれていましたが、かれこれ16問ほど解いてきた今の時点では互いに何の遜色もありません。その積み重ねは全く0のままだった頃と比べると、当然ながら大きな差だと感じます。一人一人の生徒が自分の答案に自信を持てるようになって来ると、次は自然とその書き方にユニークさを示したいという欲求が出てきます。中には推理小説に見立てて書く生徒や、豊富な語彙を駆使する生徒がいます。

以前はよく、答は見つけられても、それまでの道筋を書く段階になると、「ええー。もういいやろう。分かるし」とか「そんな無理、もうできひん」という、あきらめの声が聞かれました。しかし今では自分の中でイメージした完成形を目指して、白紙を片端から黒々と埋めてくれるようになりました。白紙に答を書くことは、四択や穴埋めと違って、実は一番難しい形式で、それなりの自信と勇気がいります。

ある時、できあがった答案に満足して、「論理パズルはな、矛盾を導いたら勝ちなんや！」と言った生徒がいます。この時は本当に誇らしく感じました。いつの間に「矛盾」という言葉を使えるようになったのか、その成長ぶりが頼もしく思えます。その生徒たちの解答はウェブログの方に完全なものを掲載していますので、そちらも併せてご覧いただけるとありがたいと思います。

『論理パズル』のまた良いところは、「手がかりを得る力」を養えることです。手がかりはもともと外から人によって与えられるものではなく、問題の中に自分で見つけ出すものです。それは、文章題においても一番必要とされることです。従って、論理パズルができれば、同じ原理は文章題にも応用できます。また文章題を苦手だと感じているほとんどの生徒に言えることですが、外からヒントが与えられたら、難なく解けてしまうことが多いのです。その解ける・解けないのほんのわずかな(実はそれが大きいのですが)差を埋めるものが、「自分で手がかりを見つけ出して、最初から最後まで一つの問題を解き切った」という、本人の経験です。『論理パズル』に限らず、一般に何でもパズルであれば、その経験を気楽なゲーム感覚で(しかし本人にとってはリアルに)積み重ねることができます。「一石二鳥」というわけです。

また、算数はよく計算だと言われますが、それゆえに文章題でも答が先に決まっています、その答にいかにか当てはめるかが、算数だと思われがちです。しかし算数の本当の楽しみは「あてはめること」ではないと私は感じます。

これは一年生の稿にも書いたことですが、「奇数+奇数=奇数? 偶数?」の答を、「知識」として教えたところで、算数がいっとうに面白くなることはまずありません。自分で、奇数の代表に1と3を持って来て、 $1+3=4$ 、4だから偶数だというように、計算や論理を駆使したことによって、これまで曖昧だったことがはっきりと示せるようになったところに、算数はすごいと感じられ、楽しめるのだと思います。

その算数本来の楽しみを一度でも味わった人は、次もまたそれを期待することができ、自分から行動が起こせます。そうなれば、「転がる石に苔は生えぬ」のように、中学生になって算数が数学へと変わった後でも、自分から新しい楽しみを取りに行くことができるでしょう。その最初のきっかけとなるような思い出を作りたいというのが、このクラスでの願いです。

(文責 福西亮馬)

秋学期を振り返って

今学期は、春から読み進めてきた『歴史小品』をついに読了することになりました。中学生にとって、決して簡単とはいえない内容でしたが、そうであるからこそ、それを読み通したことは彼らの自信になったことかと思えます。読み取った内容や自分の意見、それを基に成された議論を、これからの言語生活に生かして欲しいと思います。その一環となるかもしれませんが、せっかくなので、冬休みには『歴史小品』全体に関する感想文あるいは意見文を書いてもらおうと考えています。今から楽しみにしています。

また今学期からは、少々クラスの形式を変えました。読んだ内容について個々の感想や意見を書き、発表するだけでなく、それを互いに読み合い、またコメントを付してもらうようにしたのです。私もそれに参加し、単純な漢字の間違いやおかしい文章について添削するだけでなく、意見の論理的な部分のミスについてアドバイスや、生徒の意見に対する自分の考えを、コメントで伝えました。人は見られることによって美しくなるといわれることがあります。それはことばや文章にも当てはまるでしょう。自分の考えをまとめるための文章と、他人に見せるための文章では、まず書くモチベーションから大きく違います。そして書いた後の見直しも、前者のそれとは払われる注意力の量が大きく変わってくるでしょう。結果、そこから紡ぎ出される文章がより洗練されたものになるのは当然だと考えます。更に他者からの添削や意見を仰ぐことで、自分の気づかなかった視点や間違いに気づくことができます。それを更に反映することも可能ですし、それに対して自分の意見をぶつけて議論へと発展させることも可能です。実際、「賈長沙、痛哭す」を読んだ際に、私がある生徒に付したコメントに対して、生徒が本文の内容を吟味して論理的な反駁を行いました。それに対しては、私の完全な読み違いがあったのですが、そのように意見の根拠を見出し、更に反駁をなした点を大いに評価すべきだと考えますし、客観的にみてもこのような議論のできる「ことば」のクラスの形式の良さを認識できると思います。

こうした形式は、確かに春学期の形式より時間がかかり、私自身が効率の悪さを疑問視するなど、欠点がないとは言いません。しかしそれ以上に、上記のような「ことば」の利点があると思います。秋学期から冬学期かけては梅棹忠夫の『実践・世界言語紀行』を読み進めますが、内容は前回より若干平易になったと思います。その分、生徒も自分の意見も出しやすくなるでしょう。それによってこの形式の利点を生かし、より豊かに「ことば」を駆使できるようにしてもらえよう、生徒だけでなく私も尽力したいと思います。

(文責 岸本廣大)



(老子)

日本語の読み書き

中学生 水曜日 pm 6 : 40 ~ 8 : 00

毎授業、テキストを少しずつ読破しながら、それに基づいた作文、小論文、討論を行っています。こうした「考えることを文章によって表現する」練習が、論理的思考力の鍛錬になることは言うまでもありません。今も、そして将来も必要不可欠となる「考える力」を磨きましょう！

今学期は、クラスの進め方に関して、春学期と大きく変わった点が2点ありました。

1点目の変更点は、自作のプリントを用いるようになったことです。その理由は、白板に私が書く問題や重要な点を書き取る、その取り方や時間を効率的にしていこうと考えたためです。確かに春学期は、それを自ら行うことも大事だという考えから、あくまでも生徒の自主性に任せていましたが、春学期を通してノートのとりに方に、多くの課題があることを見出しました。しかしそれは当然のことなのです。中学一年生には、初めて学ぶ英語のノートを効率よくとるということ自体が難題なのです。そこで、今学期から私がまとめたプリントを用いることにしました。それは生徒の自主的なノート作りを困難にするかもしれませんが、それよりも寧ろ、私のプリントを参考にして、今後の自分のノート作りの一例にして欲しいと私は考えています。またプリントの構成を、一枚目は解説中心、次はそれを用いた問題、最後に和文英訳とすることで、以前より段階的かつ効率的に、各課題に取り組めるようになったと教える側の私自身は思いました。

2点目の変更点は、リスニングの練習を始めたことです。これは、生徒から英検を受けたいという要望を受け、その対策として始めることになりました。しかし、いきなり英検のリスニング問題を解くことは、恐らく困難でしょう。そこで、私は市販の中学1年生向けの参考書の付属CDを用いて、This is ~ . やI am ~ . といった今まで文法的に習った内容を中心に聞いてもらいました。それに加え、せっかくの機会なので、聞き取った英文を書き取ってもらう、いわゆるディクテーションを行っています。これは、一旦自分の中に入力した内容をもう一度出力することで、再確認としっかりした定着化を図るものです。実際にやってみると、これは非常に難しかったようです。例えばクラスでは、学校ではよく使われるHow are you? を聞いてもらいましたが、音は聞き取れても、英文に戻すのに四苦八苦していました。しかし私自身も、自信を持ってそれをできるかと問われれば即答することはできません。しかし、そのようなことを中学生から少しずつでも行うことは、きっと生徒の力になることだと思います。というのも英語は読むだけ、聞くだけ、書くだけ、話すだけでは決して取得できないと考えるからです。それぞれを相互に駆使することで、初めて英語という言語を会得できるのだと私は思います。リスニングと共に、ディクテーションを行うことは、その方針に沿うものでしょう。

このように、クラスの進め方は大きく変化しました。ただ、語学学習の基本を文法と辞書に置き、学校の復習、補助的な役割を重視する私の方針から、それらが大きくずれたものではないと思います。そのためなかなか目に見えた成果は出せないかもしれませんが、けれども、以上のような観点から生徒の英語の力を着実につけてけるような教え方、教材などの工夫を凝らしていければと思います。

(文責 岸本廣大)

中学で一通りの文法事項を習った後は、それぞれの文法事項を縦割りで1行程度の英文を訳したり、日本語を英語にしたりする練習が大切だと前号でも書きました。夏休みはその練習にうってつけなので、2人の生徒にそうした問題集を1冊仕上げるように言いました。

そのうちの1人は時間をかけて、泣きそうになりながらも1冊全部を仕上げてくれました。その甲斐あってか、英語に自信が出てきたようです。確かに質問などのやりとりをしているとかなり深いところまでわかっているのだと感じます。

もう1人はいろいろな事情で時間が足りず、それでも提出をしようとしてあまりわからないままでも完成はさせてくれました。その心意気はたいしたものですね。というのも、学校や仕事ではともかく形にして仕上げて提出するということがまず求められるでしょうから。しかしこの山の学校では、そうした配慮はしなくてもいいので自分の理解を追求してほしいのです。そのことをその生徒にも伝えて、今はもう一度同じ問題集をやり直しているところです。そして一つずつ理解しながら完成させたときにはまた違った達成感が得られることと思います。

こうした段階を乗り越えて、文法は一通りマスターできたとしたら、次は実際の英文に取り組むことでしょう。これがまた一苦労です。文法がわかっているにもかかわらず実際の英文はなかなか読めません。一つには語彙の問題がありますが、それは辞書を引けばある程度解決できます。解決できないのは、1つの語に複数の意味があってどれを採用すべきかわからないことや、複雑な文構造、あるいは和訳できても意味がわからないことでしょう。そうしたことはわかる人に聞くのが一番早いです。そうした質問を繰り返すと一人でもかなり読めるようになるでしょう。

(文責 浅野直樹)

「自分の成長」というものはなかなか分かりづらく、「他人の成長」というものはよく見えるものだとことを実感しております。この春から中学二年生の生徒 S さんには毎週授業の初めに論理パズルを解かせていました。ちなみに論理パズルとは次のような問題のことです。

ここに A、B、C の 3 人がいます。その正体は、天使と悪魔と道化（順不同）です。天使はつねに真実を述べ、悪魔はつねにウソを述べますが、道化は真実を述べることもウソを述べることもあり、意味をなさない錯乱発言をすることもあります。

A「B は天使です」 B「C は天使です」

いったいだれが何？

S さんは最初、こういう問題にどういう風に取り組んだらいいのか、というところで悩んでいたようでしたが、とっかかりのヒントを出せばすぐに論理パズルの解き方をものにしていきました。数週すれば特にこちらが何かヒントを出さなくても多少難しい問題も一人で解けるようになり、私はそれを横に見ながらその成長ぶりに目を見張るばかりでした。最近では問題を解いたあと、自分がどう考え答えを導いたのかをきちんと説明できるまでになりました。よく言われることですが、他人に説明できるということは、それは物事を深く理解しているということです。問題を解くだけならば自分の頭の中だけで終わります。そして、自分の頭の中の言語というのは、たとえ同じ日本語だとしても他人が使っているものとは違います。また、自分がすでに持っている情報を前提に説明をしますと、相手には伝わらないことが多々あります。それを他人に説明するとなると「自分の頭の中で使っている言語」を「他人に理解できる一般的な言語」に翻訳する必要があります。これを上手くできるかどうかで、おそらく説明がわかりやすくなるかどうかが変わってくると思います。

では、実際に自分の説明が上手になっていっているか、教えることが上手になっているかと考えると最初に言ったとおり、自身の成長や変化というのは非常に分かりづらいものがあります。いつも「この説明の仕方ですちゃんと伝わっているのか、理解できるだろうか」と悩んでしまいます。内容をかみ砕きすぎて退屈な授業にならないように、でも重要ところはしっかり理解できるように丁寧に、と思うのですがなかなかそのさじ加減は難しいものです。そしてもうひとつ、ヒントをどこまで出すか、タイミングはいつがいいのかというのも先生をやっていて難しいところです。生徒さんが問題を解くのに行き詰っているとついついすぐヒントを出してしまいそうになるのですが、ヒントも出しすぎると自分で考えるということを妨げてしまいます。かと言って 20 分、30 分も同じ所で行き詰らせてしまうのもストレスになって問題に取り組むのが嫌になってしまう可能性があります。（もちろん 1 時間 2 時間じっくり考えてみるのがいい問題もありますが）うまくヒントを使って解き方の方向性だけを示し、生徒さんの「あ、こうすればできるのかな？」というひらめきを誘導できればいいのですが、やはりこれもさじ加減が難しいところです。あまり具体的なヒントを出すと、もう答えを言ってしまうようなことになりすし、漠然としたヒントを出してもなかなかひらめきにはつながりません。今、相手がどこまで問題を理解しているのかを推測する力が必要だなと感じております。

最近の授業では図形問題を取り扱っており、中 2 が初めて出会う証明問題の予習と練習問題を少ししています。この証明問題はまさに「自分の頭の中で使っている言語」を「他人に理解できる一般的な言語」に翻訳する作業であり、今まで練習してきた論理パズルの成果が S さんの中で発揮され、助けになればと思います。

（文責 近藤知史）

このクラスは生徒の学年や進度がばらばらなので個別に対応しているのですが、秋学期は2次関数ということで偶然範囲が一致しました。この時期に、中学3年生では2乗に比例する関数 ($y = ax^2$)、高校1年生では2次関数 ($y = ax^2 + bx + c$) を習うことが多いようです。中高一貫校ではそうした区分けをせずに、中学生のときから2次関数としてまとめて学習することもあります。数学的にはそのほうがすっきりしているでしょう。枠にしばられずに体系的に教えることができるのは一貫校の強みですね。もちろん別々に習っても、頭の中でつなげてくれたらそれで何ら問題はないわけですが。

数学は積み上げ教科だとしばしば言われますが、特にこの2次関数の分野はそのことを強く意識させられます。まずは $y = ax^2$ を理解し、それを平行移動することを考え、次は代数的に平方完成 ($y = ax^2 + bx + c$ を $y = a(x + p)^2 + q$ に変形すること) ができるようになる。そして最大・最小を求めたり、逆に最大・最小から2次関数を決定したりする。この順番を決して無視してはいけません。1 つでも手順を抜かすとまず間違いなくわからないようになります。あせる気持ちがあっても、1 つずつじっくりと考えるべきです。特に平方完成ができるかどうかが大きな分かれ目でしょう。平方完成をするためには因数分解の理解が当然のこととして要求されるわけで、ここでもきちんと積み上げていく必要があります。

逆に言うと、2次関数は手順さえ踏めば必ずできるようになります。実際に問題を解く際に、手順に従って答えにまでたどり着いたけれど本当に合っているのかなぁと言いながら解答を見ると合っていたということが何度もありました。

どの教科でもそうでしょうが、特に数学ではきちんとすべきことをしていけば必ずできるようになります。何をすべきか (どこでつまっているか) を見抜くお手伝いはしますので、あとは反復練習など、ある程度の努力をしてもらえれば必ずやできるという実感を味わってもらえることと思います。

(文責 浅野直樹)

～論理パズル～ 『予言者シビュッラ』

問題

予言者シビュッラは百の穴の開いた洞窟に住んでいて、人間の歴史が書かれた葉を一枚一枚順番に保管しています。しかしある時、洞窟に風が吹き込んで、何枚かの葉の順番がバラバラになってしまいました。それには「ヘラクレスの12の難業」のことが書かれていました。

だいたい元通りの順番にできたのですが、まだ完全ではありません。あなたはシビュッラの助手として、彼女の記憶を頼りに、その歴史の葉 (A～E) を正しく並べなおしてください。

<ヘラクレスの12の難業が書かれた葉>
(出来事の古い順)

- | | |
|----|-----------------|
| 1 | ? |
| 2 | ? |
| 3 | ケリュネイアの鹿の捕獲 |
| 4 | エリュマンタスの猪の捕獲 |
| 5 | アウゲイアスの家畜小屋の大掃除 |
| 6 | ステュンパデスの怪鳥退治 |
| 7 | ? |
| 8 | ディオメデスの人食い馬退治 |
| 9 | アマゾンの女王の腰帯を盗むこと |
| 10 | ゲリュオンの牛退治 |
| 11 | ? |
| 12 | ? |

<バラバラになった葉>

- A 「ヘスペリデスの黄金のりんごの入手」
- B 「レルネのヒドラ退治」
- C 「クレタのミノタウロス退治」
- D 「ネメアの獅子退治」
- E 「地獄の番犬ケルペロスの捕獲」

<シビュッラの記憶>

- 1 「BはAとCよりも先の出来事」
- 2 「DもAとCよりも先の出来事」
- 3 「Bは一番最初の出来事ではなかった」
- 4 「Cは一番最後の出来事ではなかった」
- 5 「もしEがAよりも先の出来事なら、AはCよりも先の出来事、もしEがAよりも後の出来事なら、AはCよりも後の出来事」

高校生・一般の部

『古文講読』

担当 前川 ゆたか 裕

「古文講読」では、前期に引き続き『徒然草』を順に読み進めています。各段の長さにより1回数段ずつ読み勧めながら、10月末で五十段程度までたどり着きました。

兼好法師は当然ながら仏教的思想を中心としているのですが、中には中国の影響か、老荘思想と強く共鳴するような考え方を表明している段もあります。また思想的な段の他、「ものづくし」的な段もあり、当時の社会や人々の様子がうかがえて興味深いものです。

「古文講読」は、古文文法の知識が一通りあればどなたでもご参加いただけます。昔の文章でありながら、現代にも通じるところの多い「つれづれな世界」に遊んでみませんか。

(文責 前川 裕)

『ラテン語初級講読』B

担当 前川 ゆたか 裕

「ラテン語初級講読 B」は、セネカの『ルキリウスへの手紙』を引き続き読んでいます。たまたま取り組んだ第13書簡が長いものであったことや、新たに一人加わって3名となったこともあり、文法事項等も確認しながらゆっくりと読み進めています。Loeb叢書のテキストで、1回あたり15行前後を目安としています。

第13書簡は、「根拠のない恐れについて」というテーマでした。恐れは全て人間の頼りない精神から起こるものであり、心の平静こそが重要なのだ、というストア派の主張がよく表れている文章でもあります。セネカは簡潔な文で書き進めることが多いのですが、時に長い文もあります。しかしそれらも複雑ということではなく、初級文法を終えた方なら十分読み解ける程度でしょう。

冬学期も引き続き『ルキリウスへの手紙』を読む予定です。書簡単位で読み進めますので、途中からの参加も問題ありません。ご参加をお待ちしています。

(文責 前川 裕)

『ギリシア語入門』

担当 広川直幸

春学期から始まりましたこのギリシア語入門のクラスでは、現在、二名の受講生と一回一課のゆっくりとしたペースで水谷智洋『古典ギリシア語初歩』を学んでいます。今学期は全部で36課の教科書の13課から24課までを終えます。

一回一課というペースが古典ギリシア語にはちょうど良いようです。なぜかという、ギリシア語はラテン語より覚えなければならない変化表の数が多いからです。ラテン語では教科書の前半で変化表(形態論)が終わり、後半は統語論の解説になることが多いのですが、古典ギリシア語では教科書の始めから終わりまで新しい変化表が導入され続けるのが普通です。『古典ギリシア語初歩』でも、一課ごとに変化表が(人によって印象は違うでしょうが)続々と導入されます。その変化表を毎回覚えるためには一週間に一課ぐらいのペースが良いようです。

授業では春学期に引き続き語形変化の口頭練習をしつこく行っています。初めのころは変化形がなかなか口に出ず、頭を抱えていた受講生の方々も、だいぶ慣れてきたようです。また、受講生はお二方ともラテン語既習なので、分かりやすくなる場合には、積極的にラテン語を用いて説明をしています。

次の学期で教科書は終わります。春からは新しくギリシア語講読の授業も始まる予定です。古典ギリシア語未習の方も既習の方も、興味がおありでしたら、何なりとお尋ねください。

(文責 広川直幸)

今学期のラテン語入門では、以前担当された前川先生と同じく、田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』（岩波書店）を教材として用い、一回の授業で四課から五課進み、一学期三ヶ月のうちにラテン語文法の骨格を習得する予定になっています。一課ごとの文法事項を確認してから練習問題のラテン語を日本語に訳していただき、和文羅訳問題は後日添削する形をとっています。今学期はお二人が受講され、毎回楽しく真剣に進められております。

ラテン語は格変化や活用形が比較的多く、初歩の段階から覚えるべき文法事項が沢山あり、この点では何とも厄介な言語です。したがって一回につき四課から五課というペースはやはり大変かもしれません。しかし一度覚えてしまえば、一つ一つの語が「自己主張」してくれますので、文法関係が曖昧になることは稀にしかありません。多少記憶が怪しくなった場合でも、他の語形から見当をつけ判断するなどして活用表で正しい文法情報を確認できるようになれば大丈夫です。先に進めば当然以前学習したものが少なからず繰り返し現れますので、その都度確認していけばいつしか覚えられる仕組みになっています。またラテン語文法で用いられる術語はほとんどそのままの形で、もしくはそれを翻訳した形で西洋の近代語の文法にも適用されており、一見無味乾燥とした文法学習の中でもなるほどと首肯し、さらには再考を迫られる機会があるのではと思われます。

ラテン語を習得することで得られるものは数多く、その範囲、影響力は計り知れません。先ほどの術語の件もその一つですが、その中で最大のものは、ギリシア文化の伝統を継承し自らの文化を打ちたてた、キケローやウェルギリウスに代表される古典作家の作品を原文で味わえることでしょう。その過程で、作品そのものの持つ魅力や近代語の文章にも受け継がれる修辞や構成上の技術といったもののみならず、もっと広い意味で、西洋世界を強固に支えている「基盤」をおのずから体得し、涵養することが出来ます。練習問題や文例の中にそれら作家の文言が短く収められており、その一部に触れることも可能です。

さらにラテン語は、中世から近世にかけて学問世界の共通語としての地位を確立したため、数多くの重要な作品がこの言語で記されています。今回受講されたお二人も、この時期のラテン語作品を読むことが受講の主な動機になっています。当時は著作のみならず、知識人間の文通もラテン語でなされることが恒例でした。現在でも図鑑や学術的な著作集などで書名がラテン語になっているものを見かけますが、この伝統を引き継いだものと言えるでしょう。

またラテン語は現代のフランス語やイタリア語、スペイン語などのロマンス諸語の母語に当たり、これら言語の研究には欠かせないものになっています。英語はゲルマン諸語に属しますが、その語彙はラテン語に由来するものが多く、ラテン語の知識があれば、普段見慣れた語や無理やり記憶するしかなかった語の綴りが不思議と合点がいくようになり、なかなか楽しいものです。

ラテン語に *festina lente* 「ゆっくり急げ」という格言があります。いきおい授業では急ぐことに重点が置かれてしまいましたが、お二人とも日々の学習の中でゆっくり確実に学ばれており、この格言に即したラテン語学習を行われているのではと思い、その真摯な姿勢に毎回感銘を受けています。私事に渡り恐縮ですが、私がラテン語を初めて学んだとき用いられた教科書が冒頭の書の初版でした。今回新たな版で再び通読する機会を得、その昔懸命に学んだ折、不思議に思った箇所や先生が指摘くださったコメントを思い起こしながら、思わぬ記憶違いや勘違いを改められつつお二人と共に勉強を進めております。無事教科書を一冊読み通して、それぞれの目的であるラテン語作品を味読できる日を楽しみにしています。

（文責 山下大吾）

暗唱のすすめ

古典は覚えるべきものである、と最近つくづく思う。考えてみれば、ギリシア・ローマの古典は暗唱を前提としているものが多い。叙事詩や悲劇・喜劇は覚えていなければ演じることができない。散文でも、弁論は暗記が前提である。古代では音読され暗唱されたものを、現代的な感覚で黙読し訳し読み飛ばして本当に理解できるのであろうかと疑問に思う。

日本にも以前は素読の伝統があった。素読とは記憶力がまだ衰えていない子供に、何度も何度も古典を音読させ、意味の理解を求めずに覚えさせることである。意味の理解は後からついてくると考える。素読は最近見直されつつあるが、意味の理解を求めないという点で、やはり子供向けの方法である。素読に耐えられる大人はなかなかいないであろう。各自が自分の知識や経験に基づいて理解した文章を暗唱し、さらに理解を深めるというやり方のほうが、大人には向いている。

そのような訳もあり、この授業で読んでいるウェルギリウスの『農耕詩』を、今学期から読み進んだ分だけ暗唱することにした。受講生の方に無理強いするわけにも行かないので、自分を実験台にしたのである。初めのうちは山の学校の帰り道、その日の授業で読んだところを歩きながら思い出し、部屋に着いてから思い出せなかったところを確認して覚えていたのだが、最近はだんだん面白くなってきたので、授業の前に覚えてしまうようになった。面白くなるのも当然である。覚えた分だけ確実に進歩するのであるから。今読んでいる『農耕詩』第二歌は果樹についての歌である。当然のことながらさまざまな果樹の名称が出てくる。だが、暗唱をするとそれらの名称を根こそぎ覚えることができる。これだけでも相当な充実感が生まれる。するとまた覚えようという気持ちになる。好循環である。

古典を覚えるということには相当の充実感が伴う。この充実感こそ暗唱を自分以外の人にもすすめる最大の根拠である。また、覚えるものは古典でなくても良いとも思う。自分の好きな作品を覚えればよいのである。覚えてしまえば重量ゼロである。最先端技術を駆使して作られた薄型ノートパソコンもこれにはかなわない。これはとても愉快的ことではなからうか。

(文責 広川直幸)

『ウェブ・プログラミング入門』 (高校・一般クラス)

```

index.cgi
push( @items, new Link( $user->name0, list_url() ));
push( @items, [
    new Link( Word->new( "Option", mode_url( "option" ) ),
    new Link( Word->new( "Logout", logout_url() ),
]);
} else {
push( @items, Word->new( "User" ));
push( @items, [
    new Link( Word->new( "Login", login_url() ),
    new Link( Word->new( "Register", register_url() ),
]);
}

# RSS
push( @items, Word->new( "RSS" ));
my( @rss ) = ( new Link( Word->new( "LoungeRSS", rss_url( "lounge" ) ));

my( $menu_mode, $menu_id ) = @:;
if ( $menu_mode && $menu_id eq "category" ) {
    push( @rss, new Link( Word->new( "CategoryRSS", rss_url( "category", $menu_id ) ));
} elsif ( $menu_mode && $menu_id eq "topic" ) {
    use Topic;
    my( $category_id ) = Topic->topic( $menu_id->category_id );
    push( @rss,
        new Link( Word->new( "CategoryRSS", rss_url( "category", $category_id ) ),
        new Link( Word->new( "TopicRSS", rss_url( "topic", $menu_id ) ),
    );
}
push( @items, \@rss );

```

現在、多くの人インターネットを利用している。また、その利用形態は様々で、専ら情報収集に活用する場合もあれば、自ら情報を発信する場合もある。インターネットが一般的に流布しているとはいえ、情報発信に利用している人は全体のごく一部でしかない。しかし、受信にとどまらず発信することには、計り知れないメリットがあり、現代の情報社会ではますます重要な地位を占めていくことになることは間違いない。このような、情報発信という発想と技能を身に付けておくことで、今後の情報環境の変化にも柔軟に対応することができる力を養うことができる。

本授業では、このようなインターネットにおける情報発信にテーマを絞って、その具体的な方法の紹介と実習を行う予定です。授業内容は、受講生のコンピュータ、インターネット習熟度によって柔軟に対応しますが、概ねXHTMLとCGI(Perl)を扱う予定です。XHTMLは、インターネット上の情報発信の基礎となる技術で、普段目にするウェブページを構築する言語です。CGIは、ウェブ上のデータを柔軟に活用する手法で、多くの複雑なページで使われています。この他にも、必要に応じて関連分野の諸技術を取り扱うことがあります。

『自由と責任』

文 / 山下太郎

「自由」という漢字は、元来は欲望からの解脱を意味する仏教用語に由来する。何ものにも拘泥しないとらわれない心が「自由」ということになる。一方で、「自由」と聞けば、私たちは「思うまま、気まま」という言葉を連想する。昨今の日本では、「自由に生きる」と言えば「気ままに生きる」ことであり、「欲望の赴くまま生きる」とことと同義であると受け取られがちである。つまり、今の日本語で使われる「自由」とは、本来の「自由」とは逆の生き方を連想させる言葉でもある。

一方、英語で「自由」を意味する言葉 と言えば、フリー (free) を思い出す。その名詞がフリーダム (freedom) である。ビートルズの曲に "Free As A Bird" というのがあるが、自由のイメージは、しばしば大空を飛ぶ鳥を連想させる。free の意味を英和辞典で確かめると、「何かにとらわれない、縛られない、制約を受けない」状態を意味する言葉と定義されている。

ところで、何が人間の自由を妨げるのか？ と言えば、先に挙げた「欲望」ということになる。とりわけ金や権力、名誉に対する執着心とその最たるものである。「欲望」を表す英単語は desire が一般的であるが、love(愛)という語もよく用いられる。「金銭欲」といえば、love of money、「権力欲」は、love of ambition といったふうに。同様に、ラテン語でも「欲望」は amor (アモル=愛) と呼ばれる。

たしかに、理屈の上では、「欲望」を抑制すれば「自由」が手に入るということになるが、ことはそう簡単ではない。アモルは人間の生きるエネルギー (energy) の象徴であり、人間が幸福を実感する上でアモルは不可欠である、とする考えも古来有力である。これに対し、ギリシアの哲学者エピクロースは、「心の平静 (アタラクシア)」を得るために、欲望の抑制を強く主張した。今日、欲望に身を任せる「快樂主義者」のことを「エピキュリアン (Epicurean)」と呼ぶのはいささか皮肉なことと言わねばならない。

一方、「責任」という日本語に対応する英語としては、responsibility が思い出す。この言葉の語源は、respondere (レスポンドレ) というラテン語で、意味は「応答する」というものである。車やバイクのアクセルの「応答性」がよいことを「レスポンスがよい」というが (英語では responsive という) この response という英語も、ラテン語の respondere が語源である。アクセルを踏むと車がずっと前に出ていき、ゆるめると車は減速する。同様に、ある行為を行うと、その結果が必然的に伴い、行為を行わないと何の結果も生じない。両者にはイメージの共通性が見られる。

「責任」という日本語は、どちらかといえば「義務」という意味で用いられるが、英語の responsibility は、今述べたように、アクセル、ブレーキ、ハンドルをコントロールするドライバーの「責任」をイメージした方がわかりやすい。すなわち、responsibility は、その語源に照らせば、自分の意志を忠実に反映した自由な行為というイメージと結びついている。

たとえば、車のハンドルを握る人は、安全に運転する「義務」とともに、運転の「自由」と「喜び」を感じることができるが、電車に乗るとき、乗客に安全運転の「責任」はない。それゆえ昼間から車内で居眠りすることもできる。このように「責任」を伴わない行為は、「安全」であるが、面白くない。このことに関連してバーナード・ショーは次のように述べる。「自由とは責任のことだ。だから人は自由を恐れる (Liberty means responsibility . That is why most men dread it .)」と。

以上の言葉の分析をふまえて、わたしは、政治や教育についても、個人の「責任」の所在を問題としたい。政治不信を言う前に、政治を人任せにしていないだろうか。学校教育への不満を訴える前に、教育を人任せにしていないだろうか、と。政治家の無責任を言う前に、有権者の低い投票率が問題なのである。「自分一人くらいどうってことない」という意識は誰にでもある。しかし、その意識が観光地の空き缶の山を作るのではないだろうか。同様に、有権者の多くが「自分一人くらい」と考える癖がつくと、政治の世界にもたくさんの空き缶の山が出来上がるのではないだろうか。

日本が立派な国になるためには、国民の一人一人が「責任」という言葉の意味をよく考える必要がある。かのチャーチルも「偉大さの代償は、責任だ (The price of greatness is responsibility .)」と述べている。繰り返すが、英語の発想において、「責任を取る」とは謝罪を意味するのでもなければ、義務の遂行を意味するのでもない。むしろ、各自が自分の判断で自分の行動を律する態度を意味している。まずは、ひとりになって考えることから始めたい。自分流の生き方、物の考え方、感じ方を確かめるために。

(文責 / 山下太郎)